

### 五島列島に潜伏キリシタンの集落が形成される

1630年代から、バスチャンという日本人伝道士の予言が長崎の外海地方全域に広がった。予言の中には「7代たてば神父が現れ、信仰を公にする日が来る」というものがあった。他にも、神父がいない場合の告解の手引書や旧約聖書についての教理書「天地始之事」の内容が口伝えに受け継がれたりもしている。このような伝統は、キリスト教と日本文化の間で発展した共生関係、そして一部の信仰がどのようにして代々受け継がれたかを示している。

18世紀の終わりごろ、大村藩の外海地方の農民たちは五島藩の要請により五島列島へ移住した。その多くは潜伏キリシタンだったため、この移住により「天地始之事」も五島列島へと伝わった。家族単位で移住した人々は、狭隘な山の斜面を開墾し、五島各地に潜伏キリシタンの集落を形成した。

キリスト教の伝来初期に宣教師に詳細な指導を受けたことにより、長崎地方の潜伏キリシタンには組織的に信仰を継承する条件が整っていた。

(挿画：庄司好孝)

### 年表

1797 外海地方から離島への移住が始まる